

## 大橋広好\*： ミヤギノハギとケハギ再考—ケハギの 分類学的位置および学名に関して

Hiroyoshi OHASHI\*: Notes on *Lespedeza thunbergii*  
and its wild ancestor, var. *patens* (Leguminosae)

1981年に、私はミヤギノハギはケハギから1650年代に園芸化されたものであると考えられること、および、ミヤギノハギとケハギとを品種ランクで区別し、ケハギの学名に *Lespedeza thunbergii* f. *macrantha* を用いることを発表し、ケハギのシノニム、タイプ標本、引用文献等を整理した(本誌 56(8):239-244)。その後、この論文の中で扱った *Lespedeza bicolor* var. *Sieboldi* f. *sericea* Matsumura のタイプ標本の選定、*L. patens* Nakai は新学名の提案とした解釈、同種のシノニムとして挙げられた f. *sericea* Matsumura, pro parte の解釈、その他について村田源氏は私と異なる意見を発表した(植物分類地理 36:126-129, 1983)。一方、秋山忍・大場秀章両氏はケハギを独立種とみとめ、その白花品を発表している(本誌 59(4):128, 1984)。そこで、ケハギとミヤギノハギについて再検討を続けてきた。その結果、分類学的な扱いについては両者を変種のランクで区別する説を採ることとした。命名に関しては、1983年の新しい国際植物命名規約にしたがってケハギの新学名が必要となった。また、村田氏と見解の違う点については前報(大橋 1981)の補足説明をしたいと思う。

原寛先生には命名規約全般について常日ごろから教えていただいております、特に57条など新しい命名規約については制定の経過、国際委員会での討議や問題点などについてまで詳しく御教示いただいた。さらに、本論文の原稿について御批判をいただいた。また、本研究の間、伊藤至氏(新潟県弥彦村)、庄司清裕氏(山形県大石田町)および古瀬義氏(栃木市)にはケハギについて教えていただいたり、標本をお送りいただいた。皆様に心からお礼申し上げます。

### 1. ミヤギノハギとケハギの分類学的関係

ミヤギノハギとケハギの分類学的な関係については今後まだ研究すべき点が多いと思うが、主として外部形態を中心に比較してみると、両者は非常によく似ている。いわゆる草萩で、地上部は冬に枯れてしまい、翌春、地表あるいは地表近くの地中の越冬芽から側枝が成長する。花部器官の形態は特によく似ており、花は全体が日本産の他の種類の花よりも大きい。がく歯が長く、その先端はやや鋭尖形であるが、マルバハギのように尖らない。翼弁が竜骨弁よりも著しく短く、かつ基部で上向きに曲がる。果実は他

\* 東北大学 理学部生物学教室, Biological Institute, Faculty of Science, Tohoku University, Sendai 980.

の種類よりもやや大きい。これらの基本的な特徴で共通するので、両者は別種とは考えにくく、ミヤギノハギはやはり明らかにケハギの一形であると思われる。

自然に生育しているケハギの中から、花が大きくて、茎や葉に毛があまり目立たず、葉先の尖っている形が人為的に選び出され、古くから北陸地方では観賞用に庭先に植えられていたと想像される。この美しい萩が北陸地方を離れて園芸植物として京・大阪あるいは滋賀あたりに広まった。こうして、より人目につくようになって、さらに花序や枝がより長く伸びて、しだれる形のものが、特に選び出されて来た。これがミヤギノハギであると私は考えている。ミヤギノハギの名は元禄7年(1694)脱稿、同11年(1698)刊行の貝原益軒「花譜」に初めて記録されているという(木村有香:宮城野萩と宮城野の萩,東北の自然 1:4-5, 1964)。ミヤギノハギの親となったケハギは茎の毛がやや少なくて平伏している、いわゆるタテヤマハギ型の個体であると考えられる。

ミヤギノハギはケハギに比べると、花序が長く伸びること、花卉やがくがやや大きいことが多く、小葉の両端が尖り、その上面が無毛であること、枝が長く伸びてしだれることなどの特徴をすべて備えている特有の形である。自然状態でミヤギノハギがケハギの中に混ることはないようである。このため、私は前報で両者を品種ランクで区別したが、変種ランクで区別することがよいと考えるようになった。

## 2. *Lespedeza bicolor* f. *sericea* Matsumura の syntype について

ケハギの和名は松村任三先生が名付けたものであろう。あるいは地方名としてあったのかもしれない。中井猛之進先生が1923年 *Lespedeza patens* Nakai の発表の時に、その和名として初めて公表したものであるが、標本ラベル上には松村の手でケハギと書かれている。例えば、その標本の一枚、明治26年8月20日信州戸隠山の標本には「*Lespedeza bicolor* Turcz. var. *Sieboldi* forma *sericea*. ケハギ」とある。

ケハギに対して最初に与えられた学名は *Lespedeza bicolor* var. *Sieboldi* f. *sericea* Matsumura (植物学雑誌 16:70, 1902) である。日本で最初のマメ科のモノグラフである A conspectus of the Leguminosae found growing wild, or cultivated in Japan, Loochoo and Formosa の中で発表されたもので、その原記載を図1に挙げる。ここではミヤギノハギの一形として区別されており、ミヤギノハギに比べて、茎の毛がしばしば開出または反曲し、小葉が鈍頭で、下面に密に絹毛があると特徴づけている。この記載の次に Aizu, Tateyama, Togakushiyama という3点の地名が挙げられている。これを村田氏(1983)は産地を示しており、標本の引用ではないとしているが、私(1981)は標本すなわち syntypes を指していると解釈している。村田氏はこれらの地名から特定できる東大に現存する3点の標本は原記載に直接引用されていないので original material と考えられるものであり、それらを syntype とする私の扱いは国際植物命名規約 Art. 7-7 に関する誤りであるように書いている。しかし、Art. 7-7 は syntype の定義をのべているものであり、ここで問題となっている松村(1902)の発表した地名の解釈

bb. Standard and keel subequal. Calyx-teeth lanceolate, longer than the tube. Pod elliptical, obtuse, pubescent. Tokio; Izumi; Hitachi. Also cult. Fl. June-Sept.

(ミヤギノハギ) *L. bicolor*, Turcz. var.  
*Sieboldi*, Maxim.

Hairs on the stems often spreading or reflexed. Leaflets obtuse, densely silky below. Flowers large. Aizu; Tateyama; Togakushiyama.

*forma sericea*.

図 1. *Lespedeza bicolor* var. *sieboldi* f. *sericea* Matsumura の原記載. 植物学雑誌 16:70 (1902) に発表された。

というような問題、更に一般的にいえば、古い時代の原記載に採集者なしで引用されている地名を産地あるいは標本のどちらの指定と解釈するかという問題、の解決方法について規定しているものではないので、この問題について前報の私の考えを詳しく説明する必要があると思う。

標本の引用として理解される発表型式は1902年頃と今日とは同じではなく、当時は f. *sericea* Matsumura の原記載に地名が引用されていれば、そのことはそこで採集された標本のあることを意味していた。それがどこにあるどの標本であるか関係者には間違いなく判定できる状況であった。松村もこの当然の条件のもとで発表したことを考慮しなければならない。この意味で、私は f. *sericea* Matsumura 原記載の3つの地名は、採集者や採集年月日を挙げていなくても、当時はそれだけで今日のタイプ標本の発表と同じ意味で発表されているのであり、syntype の発表であると解釈すべきものと考えている。産地のみを示しているのではなく、当時の発表の慣例に合った正確な標本の指示であると思う。なお、この発表型式に関する点は、f. *sericea* Matsumura に限ることではなく、この論文に含まれている他の新種、新変種、新品種についても、同じ解釈を適用すべきであると考え。これらも同じ型式によって簡単な特徴と地名で発表されているものが多いが、その地名は単に産地ではなくて、具体的に標本を指定していると理解できるものである。

植物分類学の20世紀初期以前の文献をみると、新種などの原記載では今日ふつうの型式のように直接には標本を引用せず、例えば産地を Japonia とだけしてあるものが多い。それが国際的に一般の発表型式であったようである。その発表によって特定の標本が示されていると理解できるので、それはタイプ標本の指定と同じであると解釈して、今日の分類学ではその標本をタイプとして扱っている。日本の初期の植物分類学者の発表し

た新種などに関しても同様である。例えば1908年の植物学雑誌22巻をみると、牧野富太郎や松村・中井の新種等が記載と地名によって発表されており、標本の採集者や採集年月日等は挙げられていない。しかし、この発表から決まった標本が特定できるので、これまでも、原記載に引用されている地名をタイプ標本の指示と同様であると解釈してきたのである。「Original material と考えられるもの」(村田 1983) と理解される標本ではなくて、タイプ標本であることが日本植物の分類学の基礎として重要なことである。

初期の日本の分類学者が活躍した時代には学名のタイプの概念が今日のように厳密ではなかったし、新分類群の発表型式も今日と異なっている。古く発表された新種などの基礎となった標本に関して、タイプ標本か否かの判定については当時の発表型式や習慣、また植物学界の状況などを考慮に入れ、過去の発表に対して公平さを保つように配慮しなければならない。国際植物命名規約が過去にさかのぼって適用されるものであっても、その条項をいかに解釈して適用するかについては今日の分類学者の判断が必要である。単に今日通用している型式だけを基準とせずに、歴史をふまえて、先輩の業績を公平に評価するように命名規約を適用することが大切であると考ええる。

### 3. *Lespedeza bicolor* f. *sericea* Matsumura の lectotype について

*Lespedeza bicolor* var. *Sieboldi* f. *sericea* Matsumura の lectotype 選定について2通りの見方がある。第1は私の解釈で、1927年に中井(萩類の研究 19ページ)によって Mt. Togakushi (K. Watanabe 1893 Aug. 20 TI) が選ばれたとするもの(大橋 1981)、第2は村田氏(1983)の解釈で、1923年に中井(植物学雑誌37巻79ページ)によってケハギ *Lespedeza patens* Nakai 発表の際に、Mt. Tateyama (J. Matsumura 1884 July 23 TI) が選定されたとするものの2通りである。

まず従来の選定について再検討する前に、f. *sericea* Matsumura の原記載と syntypes について検討してみよう。原記載で f. *sericea* の特徴は茎の毛、小葉の先端、花の大きいことの3つが取り上げられている(図1)。3枚の syntypes でこれらの特徴がどのようにみられるかを表1にまとめた。以下、3枚の syntypes を会津、戸隠、立山と略称する。

表1から明かなように、f. *sericea* の原記載に戸隠が総ての特徴でよく合致しており、それに対して立山は3特徴のうち2点で、会津は1点で合致していない。この事実から、戸隠が f. *sericea* Matsumura の lectotype として適当である。それに反して、立山は原記載に2/3の点で矛盾するので、これをあえて lectotype と選定するのは無理なことである。

次に、中井(1923)が f. *sericea* の lectotype を立山と選定したとする村田氏の解釈について検討してみよう。

ケハギ *Lespedeza patens* Nakai の原発表(植物学雑誌 37: 79, 1923)では '*L. bicolor* var. *Sieboldii* f. *sericea*, Matsumura in Bot. Mag. Tokyo 16: 69. p.p. (1902)' がシノニムに引用されている。ケハギとしての標本は引用されていない。次の

表 1. *L. bicolor* f. *sericea* syntypes での特徴の分布.

Syntype 特徴	Aizu	Tateyama	Togakushiyama
Hairs on stem <sup>1)</sup>	patentibus	adpressis	reflexis
Leaflets <sup>2)</sup>	acute	obtuse	obtuse
Flowers	large	? <sup>3)</sup>	large

<sup>1)</sup> Syntypes 台紙上に松村の手で記載されている。

<sup>2)</sup> 立山を除いて、中井 (1923) の記載による。

<sup>3)</sup> 標本に開花中の花がついていない。

で、*L. patens* の 2 変種, var. *acutifolia* Nakai と var. *obtusifolia* Nakai が記載され、前者には Aizu (R. Yatabe et J. Matsumura), 後者には in monte Togakushi (K. Watanabe) の各一枚の標本が引用されている。この標本はそれぞれの holotype であり、1927年には中井 (萩類の研究 20ページ) もそのように指定している。この 2 枚の標本はそれぞれ、f. *sericea* の syntype である会津と戸隠に相当する。

この扱いで、中井は会津と戸隠は *L. patens* に属し、立山はそれに属さないことを明らかにしたことになる。すなわち、*L. patens* のシノニムに引用された f. *sericea* Matsumura, pro parte の意味は f. *sericea* の一部 (すなわち会津と戸隠) は *L. patens* に含まれ、一部 (すなわち立山) はそれに含まれないことを示している。村田氏 (1983) はこの中井の扱いが、間接的に f. *sericea* Matsumura の lectotype として立山を選定したことになると解釈する。すなわち、*L. patens* のシノニム f. *sericea*, p.p. の意味を 'f. *sericea* そのものを除外した残り' であると考えている。その根拠を村田氏は述べていない。f. *sericea* Matsumura の複数の syntypes 中の 1 個の標本を中井 (1923) が最初に選び出したと解釈するためであると思われる。

松村はケハギという種類を f. *sericea* と命名したが、その特徴を的確に引き出せなかった。3 枚の syntypes の台紙上に毛の様子をそれぞれノートしていても原記載には立山の毛が平伏するという形質を記述しなかった。また、小葉の先端は obtuse としながら、acute である会津を含めている。次いで、中井 (1923, 1927) がその syntypes の 1 枚 (すなわち立山) をマルバハギと誤って同定して、それを除いた *L. patens* を作った。中井は松村のケハギについてよく理解しており、ケハギからマルバハギを除外した。すなわち、*L. patens* のシノニム f. *sericea* Matsumura, p.p. の内容はこのシノニム *sericea*に残っているのである。村田氏はこの点を全く逆に考えていることになる。中井は茎の毛が平伏したものを除くことによって、ケハギを原記載に厳密にあわせて特色づけたのである。その原発表に 'Affinis *L. cyrtobotrya* sed caule patentim v. sub-reflexo-villosulo, ……' とあるのは、この立山を根拠としたものと思われる。

この立山は、ケハギ発表の4年後の1927年に日本、朝鮮のハギ属を集大成した中井の「萩類の研究」の中でマルバハギの標本の一つとして引用されている(44ページ)<sup>1)</sup>。しかし、ここに *f. sericea* をマルバハギのシノニムとして引用してはいない。この事実からさかのぼって中井の考えを推定してみても、松村のケハギの学名は *L. patens* のシノニムであり、そのタイプに自分がマルバハギと思う標本を選定するとは考えられないことである。中井(1923)の目的は *f. sericea*, *pro parte* としてケハギからマルバハギと考える立山を除外することであった。村田氏の見解は除外された標本が1枚であることを特に取り上げて、原記載によりよく合致する他の標本を考慮せず、さらに中井の分類学的見解を無視して、立山を *lectotype* と選定している。型式的には村田氏の解釈も成り立つかのようにみえても、学問的には全く間違っている。

以上のように、立山を *f. sericea* Matsumura の *lectotype* とすることは植物学的に明らかな間違いである。しかし、村田氏(1983)は立山が中井(1923)によって *lectotype* として選定されたと命名規約に基づいて解釈しているので、松村、中井のケハギの理解を正しく反映している *lectotype* の選定を今日の国際植物命名規約(1983)ののっとって改めて考えてみたい。命名規約第8条(9ページ)および *Guide for the determination of types* (79-80ページ)には、最初に選定された *lectotype* に、後の研究者は従わなければならない。ただし、その *lectotype* が原記載に重要な点で矛盾したり、ほとんど全く機械的方法に基づいて選択されたことが明らかにされた場合には最初に選定された *lectotype* を取りかえてもよい、とある。これまで述べたように、中井(1923)は自身で選定したのではなく、村田氏がそのように解釈しているのであるが、最も肝腎な点は、立山は *f. sericea* の原記載に重要な点で矛盾することである。さらに立山が *lectotype* として選定されたと考えることは中井によるケハギの理解に明らかに反する、全く機械的な処置である。このように、命名規約に従っても、中井(1923)によって立山が *lectotype* として選定されたと解釈する村田氏(1983)の発表結果を否定するに十分な理由が成立すると思う。そして、原記載に合致する戸隠を *f. sericea* Matsumura の *lectotype* として認めることができると思う。この選定は、次章に述べるように中井(萩類の研究 19ページ, 1972)の意図したものであると考えられる。

#### 4. *Lespedeza patens* Nakai の発表とタイプ標本

前報(大橋 1981)で私はケハギの学名 *Lespedeza patens* Nakai の発表(植物学雑誌 37: 79, 1923)を新学名の提案であると解釈したが、村田氏(1983)は新種としての発

<sup>1)</sup> この標本はマルバハギではなく、後に前川文夫先生(1934)はケハギの変種タテヤマハギ *L. patens* var. *macrantha* (Honda) F. Maekawa とした。前川はそのシノニムに *f. sericea* Matsumura を *pro minoribus partibus* と解釈をつけて引用している。中井が立山をケハギから除外して、*L. patens* Nakai を定義していること、すなわち *f. sericea* の内容は2枚の *syntypes* にも残っていると明記している。

表であると主張している。この点について以下に検討してみたい。

*Lespedeza patens* Nakai の発表で中井 (1923) は *L. patens* Nakai, sp. nov. とし、次にシノニムを挙げている。今日では sp. nov. は新種であることを示し、新名であるならば nom. nov., あるいは種としての新ランクであるならば stat. nov. とすることが常識である。しかし、この当時の中井の発表型式をみると、種ランクでの新名と新ランクに対して sp. nov. を使っている。当時は新ランクを示す stat. nov. という表現を使わなかったようである。植物学雑誌 37 卷 12 ページ (1923) の *Vicia deflexa* Nakai, sp. nov. の発表ではシノニムの一つに *V. venosa* var. *cuspidata* Maximowicz を挙げており、記載をつけて、標本として Hondo: in prov. Shinano を引用している。この標本は Maximowicz の var. *cuspidata* 原記載に引用されている Nippon: prov. Sinano, s. n. Yebira fudzi fl. mis. Tanaka と同じものである。その上、*V. deflexa* の記載の中に ‘Nomen mutandum est ne confundatur cum *V. cuspidata*, Boissier.’ という文章がある。これらのことから *V. deflexa* Nakai, sp. nov. の sp. nov. は明らかに種としての新名 *V. deflexa* Nakai の発表であることが判る。また *Vicia bifolia* Nakai, sp. nov. も *V. unijuga* var. *bracteata* Fr. & Sav. を新らしく種としたものであり、var. *bracteata* をシノニムに挙げている。この発表も sp. nov. としていて、記載をつけていても種ランクの新名の提案であることが判る。また、例えば、植物学雑誌 35 卷 (1921) では *Tilia rufa* Nakai, sp. nov. (12 ページ) として *T. amurensis* var. *rufa* Nakai in Bot. Mag. Tokyo 33: 61 (1919) をシノニムに挙げ、記載をつけ、var. *rufa* の syntypes 2 点を種 *rufa* にも引用している。同誌 36 卷 (1922) では *Astilbe formosa* Nakai, sp. nov. (12 ページ) にシノニム *A. chinensis* var. *formosa* Nakai in Bot. Mag. Tokyo 33: 54 (1919) を引用し、記載をつけ、var. *formosa* の holotype は種 *formosa* の syntype となっている。これらの例は変種のランクを上げて新しい種を作ったものである。今日ならば sp. nov. ではなくて、stat. nov. として示すのが普通である。

以上の事実から、中井の sp. nov. は種のランクで新しい学名という意味で用いられ、今日では区別して用いている stat. nov. が含まれていて、新種の学名であることだけを意味していないことが判る。この点から *L. patens* Nakai, sp. nov. の意味はこの学名が種ランクとして新しいことを示している。

*Lespedeza patens* Nakai, sp. nov. の次にシノニム *L. bicolor* f. *sericea* Matsumura, p. p. を挙げている点は、前述の例にも示されているように、新発見の新種ではないことを示している。中井は松村のケハギ、すなわち f. *sericea* Matsumura をよく理解したうえで、ミヤギノハギとは独立の新種であると考えていた。そこで、マルバハギを除外して、残りの、正しいケハギだけを残した f. *sericea* を種ランクに移したのである。しかし、種小名としての *sericea* には先行名 *Lespedeza sericea* Miq. (1857)

があるため、*L. sericea* (Matsumura) なる新組み合わせを作ることができず、新しい種名として *L. patens* を提案したと考えられる (大橋 1981)。

次にケハギを *L. cyrtobotrya* および *L. sieboldii* に比較して区別点を述べ、続けてケハギを記載している。この記載は中井による新しい種の範囲を示すものである。次に和名ケハギが発表されている。

和名の後に、中井による新種の発表では必ず引用されるその新種の標本がここでは引用されていない。このことも、*L. patens* Nakai の発表が新種の発表と解釈できない点の1つである (大橋 1981)。*L. patens* としての標本を直接に引用していない理由は、ケハギである戸隠と会津とを変種として相互に区別したためであると思われる。このため、次には var. *acutifolia* Nakai と var. *obtusifolia* Nakai が、それぞれ f. *sericea* の syntype 会津と戸隠をタイプとして、発表されている。ケハギには小葉の先の尖るもの、すなわち会津、と円いもの、戸隠、とがあるので、中井 (1923, 1927) はそれぞれを変種として命名したのである。

同様の分類学的な扱いを中井 (1927) は萩類の研究の中で、*Lespedeza japonica* Bailey に対しても行なっている (23-26ページ)。中井は *L. japonica* を5変種に分けており、その中の1つ var. *albiflora* Nakai の下に *L. japonica* Bailey をシノニムとして引用している (25ページ)。すなわち、var. *albiflora* Nakai は *L. japonica* のタイプを含む変種であるから、今日の意味での var. *japonica* に相当する。中井のこの扱いをみると、*L. japonica* の中の var. *japonica* に相当する変種に対して、当時は、新しい学名を与えていたこと、すなわちこの場合には var. *albiflora* と命名していること、が明らかである。

この中井の扱いからみると、*Lespedeza patens* の場合にも var. *obtusifolia* か var. *acutifolia* かどちらかが、母種と同じタイプを含む変種であり、今日でいう var. *patens* に相当する内容をもった変種であると考えられる。変種ランクで *patens* の epithet を残していないだけで、*L. patens* のタイプ標本の内容はどちらかの変種に残っているのである。

種のタイプ標本は、その種が種内分類群に分割されたときに、必ずどれかの種内分類群に帰属することになる。当時の中井の分類学的な扱いでは、タイプ標本に基づく内容だけが種内分類群のいずれかに帰属したのであり、その種の epithet あるいはタイプを含むことを示す *typica* などの名を種内分類群の1つに残すことはしていない。また、種が種内での特徴に基づいて変種に分けられたとき、種のタイプを変種のタイプとしたとしても、変種は種と別の epithet を持つとされていたようにみえる。ケハギを、var. *obtusifolia* と var. *acutifolia* に分けたので、ケハギのタイプ標本は変種的一方に帰属することになる。そのタイプを変種のタイプとしながらも変種には変種としての特徴を示す種と別の epithet を付けたと考えられるのである。





け は ぎ

*Lespedeza patens* NAKAI

信濃国戸隠山産、東京帝国大学理学部植物学教室所蔵ノ原標本ヲ寫ス。

図 2. 萩類の研究 19ページ。東京大学植物標本室に現存する本標本には松村の書いたラベルと *Pilis reflexis* のノート、および中井の同定ラベルがついており、Typus の印が押されている。

*patens* Nakai として戸隠山産 var. *obtusifolia* の原標本の写真が出ているというのが正しい記述であろう」(1983, 127-8ページ)と述べている。しかし、村田氏のこの文章では、中井が「ケハギ *L. patens* の原標本を示している」事実を「この標本は var. *obtusifolia* のタイプである」という別の事実で置きかえている。その結果、村田氏は中井の発表の本質を無視していることに気付かず、実は自分の解釈を中井の考えとして記述しているように思えるのである。

以上をまとめてみると、次のことが明らかである。*L. patens* Nakai は新名として発

ケハギの原発表 (1923) の後に萩類の研究 (1927) がでて、ハギ属のタクサに関する中井の全体的な考えがより明瞭になっている。この本の中で中井は初めてケハギの写真を示し (19ページ), 「けはぎ *Lespedeza patens* Nakai 信濃国戸隠山産、東京帝国大学理学部植物学教室所蔵ノ原標本ヲ寫ス」と解説している (図2)。同書の中では原標本という言葉はタイプ標本の意味であり、ケハギ以外にもしばしば用いられている (例えば 2, 52, 54ページ他)。したがって、中井は明らかに「ケハギのタイプ標本」を同書19ページで示しているのである。すなわち、ケハギのタイプ標本については中井 (1927) は戸隠を指定しているのである。この戸隠は *L. patens* var. *obtusifolia* Nakai のタイプ (中井 1923, 1927) であるから、var. *obtusifolia* は、今日の命名規約でいう var. *patens* に相当する。

村田氏 (1978, 1983) は上の中井の解説について、「ケハギ *L.*

表されたものであり、*L. bicolor* var. *sieboldii* f. *sericea* Matsumura を種ランクに上げたものである。また、中井 (1927) は萩類の研究19ページで、*L. bicolor* f. *sericea* Matsumura の lectotype は戸隠であると自ら選定したのである (大橋 1981)。

#### 5. ケハギとその諸品種の学名

*L. patens* Nakai のもとで発表された最初の変種名は、同時に発表された var. *obtusifolia* Nakai と var. *acutifolia* Nakai である。ケハギをミヤギノハギの変種と考えると、学名はこの2つの変種名から選ぶことが必要であったため、大井 (日本植物誌、改定新版 1965) は *L. thunbergii* var. *obtusifolia* (Nakai) Ohwi を発表した。ところが、国際植物命名規約の一部が最近変わり、第57条3項 (1983年版 58ページ) を適用すれば *L. patens* Nakai var. *obtusifolia* Nakai および var. *acutifolia* Nakai の autonym である var. *patens* (Nakai) が同時に自動的に生まれることになり、さらに前の2つの名に対して変種としての優先権を持つことになる。このため、ミヤギノハギの変種ケハギの学名を var. *patens* と変更することが必要となる。

ケハギにはタテヤマハギと名付けられた形と、ケハギとタテヤマハギとにそれぞれ白花品が知られている。タテヤマハギは前川 (1934) によってケハギの一形であることが初めて明らかにされ、変種として区別された。村田氏は *L. thunbergii* var. *acutifolia* (Nakai) Murata の下で品種のランクに変更した。Var. *acutifolia* (Nakai) Murata という学名は村田氏 (1978, 102ページ) の挙げる理由では、命名規約上 unnecessary な組み換えであるが、学名としては有効である。*L. thunbergii* var. *acutifolia* f. *macrantha* (Honda) Murata も *L. thunbergii* のもとで有効な学名である。前報 (1981) では私はこの学名を生かして、タテヤマハギを含めたケハギに用いた。新潟県植物分布図集第2集 No. 90 と No. 91, pp. 167-174 (1981) にはケハギ型とタテヤマハギ型を区別して、それぞれの詳細な分布図が発表されている。両型は茎の毛の状態によって区別され、自然状態でもおしぼ標本でも識別できることが多い。新潟県以外の地域においても両型を区別できることが多い。そこで、この形質による違いの信頼性についてまだ調べるべき点があるが、便宜上、両型を品種ランクで区別しておきたいと考えている。

タテヤマハギの白花品は新潟県でしばしば栽培されている。これにつけられた最初の学名は *L. thunbergii* var. *acutifolia* (Nakai) Murata f. *leucantha* Murata である。ケハギの白花品は *L. patens* f. *nivea* S. Akiyama & H. Ohba である。和名は、タテヤマハギの白花品としてシロバナタテヤマハギ (村田 1978)、ケハギの白花品としてユキハギ (秋山・大場 1984) が発表されている。

タテヤマハギと白花品を品種ランクでケハギの中で区別したので、このランクでのケハギの学名も必要となる。この場合に松村の f. *sericea* は *L. thunbergii* f. *sericea* Hatusima (1967) があるので、使えない。そこで、やはり第57条3項を適用して、*L. patens* f. *macrantha* (Honda) Hatusima (1967) に優先する [f. *patens* (Nakai) を

作の必要がある。

以上の結果に基づいて、ケハギの学名を以下のように整理する。前報 (1981) で引用した各学名のタイプ標本は *f. sericea* を除いて他は省略する。また引用文献も省略する。

**Lespedeza thunbergii** (DC.) Nakai

var. **patens** (Nakai) Ohashi, comb. nov. ケハギ

*L. bicolor* var. *sieboldi* *f. sericea* Matsumura in Bot. Mag. Tokyo (=BMT) 16: 70 (1902). **Lectotype**: Prov. Shinano, Mt. Togakushi (K. Watanabe, 1893 Aug. 20, TI).

*L. patens* Nakai in BMT 37: 79 (1923). *L. patens* var. *acutifolia* Nakai in BMT 37: 79 (1923). *L. patens* var. *obtusifolia* Nakai in BMT 37: 79 (1923).

*L. penduliflora* var. *sericea* (Matsum.) Ohwi in Journ. Jap. Bot. (=JJB) 26: 234 (1951).

*L. thunbergii* var. *obtusifolia* (Nakai) Ohwi, Fl. Jap. rev. ed. 790 & 1438 (1965); Fl. Jap. ed. Engl. 559 (1965). *L. thunbergii* var. *acutifolia* (Nakai) Murata in Acta Phytot. Geob. (=APG) 29: 104 (1978), nom. illeg. sensu Murata.

*L. thunbergii* *f. macrantha* (Honda) Murata sensu Ohashi in JJB 56: 242 (1981), excl. syn. cit. *L. patens* var. *rotundifolia* Honda.

*f. patens* (Nakai) Ohashi, comb. nov. ケハギ

(*L. bicolor* *f. sericea* Matsumura, p.p. excl. specim. cit. Tateyama).

*L. patens* *f. patens* (Nakai): cf. Hatusima (1967).

*f. macrantha* (Honda) Murata タテヤマハギ

(*L. bicolor* *f. sericea* Matsumura, p.p. incl. specim. cit. Tateyama).

*L. patens* var. *macrantha* (Honda) F. Maekawa in BMT 48: 52 (1934). *L. grandis* Koidzumi in APG 4: 159 (1935). *L. patens* *f. macrantha* (Honda) Hatusima in Mem. Fac. Agr. Kagoshima Univ. 6: 13 (1967). *L. thunbergii* var. *acutifolia* (Nakai) Murata *f. macrantha* (Honda) Murata in APG 29: 104 (1978).

*f. leucantha* Murata シロバナタテヤマハギ

*L. thunbergii* var. *acutifolia* (Nakai) Murata *f. leucantha* Murata in APG 29: 105 (1978).

*f. nivea* (S. Akiyama et H. Ohba) Ohashi, comb. nov. ユキハギ

*L. patens* *f. nivea* S. Akiyama et H. Ohba in JJB 59: 128 (1984).

### Summary

*Lespedeza thunbergii* (DC.) Nakai is a commonly cultivated, beautiful lespedeza in Japan. In a previous paper (Ohashi in Journ. Jap. Bot. 56: 239–244, 1981), I considered that this species has been derived from a wild lespedeza native to the Japan Sea side regions of Honshu from Yamagata to Ishikawa Prefectures. This ancestral plant was described by Matsumura (in Bot. Mag. Tokyo 16: 70, 1902) as a form of *L. bicolor* var. *sieboldii*, which is a synonym of *L. thunbergii*. The form, i.e., *f. sericea* Matsumura, has been treated by many students variously as an independent species or a variety or form of *L. thunbergii* or its synonyms. A new combination for the ancestor is proposed in the present paper as *L. thunbergii* var. *patens* (Nakai) Ohashi on the basis of *L. patens* Nakai (in Bot. Mag. Tokyo 37: 79, 1923) under the article 57–3 of the International Code of Botanical Nomenclature 1983. This variety includes four forms distinguished from each other by differences in mode of hairs on stems or color of flowers.

The lectotype of *Lespedeza bicolor* var. *sieboldii* *f. sericea* Matsumura was proposed by Murata (in Acta Phytotax. Geob. 36: 129, 1983) as ‘Mt. Tateyama (J. Matsumura, 1884 Jul. 23, chosen by T. Nakai in Bot. Mag. Tokyo 37: 79, 1923)’ instead of my previous proposal, ‘Mt. Togakushi (K. Watanabe, 1893 Aug. 20, TI—Lectotype chosen by T. Nakai, *Lespedeza* Jap. Korea 19, 1927)’ (cf. Ohashi 1981). Although Nakai (1923) never chose the lectotype by himself in the paper cited by Murata, Nakai considered *f. sericea* Matsumura to be identical with his *L. patens* Nakai except one of the three syntypes of *f. sericea*. The excluded syntype, Mt. Tateyama, was identified by Nakai (in *Lespedeza* of Japan and Korea 44, 1927) as *L. cyrtobotrya* Miq. Murata (1983) regarded that the exclusion of one syntype by Nakai (1923) is the same treatment as selection of the lectotype of *f. sericea*. However, the proposal by Murata (1983) is not acceptable. The syntype Mt. Tateyama is in serious conflict with the original description. Of three diagnostic characters of *f. sericea* described by Matsumura only one is referable to the syntype Mt. Tateyama, while all the three characters are available on another syntype Mt. Togakushi, one of the remaining two syntypes of *f. sericea* Matsumura. Moreover, Nakai (1923) excluded this syntype from *f. sericea*, because in 1927 he cited it under *L. cyrtobotrya* without quoting *f. sericea* as a synonym of the species.

The syntype Mt. Togakushi, on the other hand, agrees well with the original description. Nakai (1927) selected it as the type of *L. patens* Nakai which was proposed as the new name for *L. bicolor* f. *sericea* Matsumura. As I have proposed (Ohashi 1981), therefore, the lectotype of *L. bicolor* f. *sericea* Matsumura is the syntype Mt. Togakushi, i.e., Prov. Shinano, Mt. Togakushi (K. Watanabe, 1893 Aug. 20, TI).

□中国植物学会 (編): 植物分類学報 増刊 2 (索引 vols. 1~18) 300 pp. 1984. ca. ¥ 2,230. 植物分類学報は中国の植物分類学に関する最重要な定期刊行物であり、現在 vol. 23 まで出版されている。この雑誌の増刊号 2 として今回出版された本書は、植物分類学報に関する初めての索引である。本学報 vols. 1~18 の出版された30年間に発表された論文は 500 編を越えているので、本索引から受ける利益は大きい。3 部分から成立し、主要部分は種の中国名および学名の索引であり、他に論文表題の中国名および欧文名索引、著者名索引がある。なお増刊 1 は普通の論文集であり、総索引のようなものではない。 (津山 尚)

□花井哲郎・小西健二・速水 格・鎮西清高 (訳): 古生物学の基礎 (Raup, D.M. & S.M. Stanley: Principles of paleontology) 425 pp. 1985. どうぶつ社, 東京. ¥9800. 最近のめざましい生物学の進展にともなって自然史の研究にも新しい見方や研究法などが導入され、これらに関連した教科書が欧米で多数出版されてきた。本書もそうした新しい潮流にそって古生物の原理や考え方および研究法を述べた最初の教科書であるといわれている。本書は 2 部 12 章からなる。第 1 部は「化石の記載と分類」で 7 章からなり、化石を種のなかの標本として、種として、さらに種の階級的な群として研究する方法が述べられている。第 2 部は「古生物学的資料の利用」で、化石情報の地質学や生物学の問題への適用が取扱われている。著者は第 1 部について「分類学」または「系統分類学」としてもよかったが、少し視野が異なると書いている。しかし、マクロなレベルでみたら、ちがいはわずかである。植物の分類学・系統分類学の原理を述べたすぐれた教科書の少ない日本では、この目的の教科書としても最も信頼されかつ有益なものとなるであろう。訳者の労に感謝したい。 (大場秀章)

□太田久次: 三重県帰化植物誌 149 pp. 1985. ムツミ企画, 津市浜見町 727-20. ¥4,500 著者40年間の研究の集大成で、I 総論、II 目録より成る。総論では三重県における帰化の年代と経路、主な帰化センターなど著者の研究がのべられている。目録には 491 種について産地、記録年代が記されている。末尾に参考文献表、植物名索引がある。今後さかんになるであろう帰化植物の記録の一スタイルを示すものである。 (金井弘夫)